

この小論の目的は、現代の解釈学の哲学的前提出を論じることではなく、「ポストモダン」<sup>1)</sup>と言われる思想が聖書学などのような影響を与えているか、特に、インター・テクスチュアリティー（間テクスト性）について、「テコアから賢い女」（サム一四）のマーシャル（譬え）の解釈を中心考察することである。

歴史主義から構造主義へ

一九世紀に確立された「歴史的」批評的研究は、文学的前史を解明するという発生史的関心、即ち、文学の成立の

## 「ポストモダン」の聖書解釈

特にインター・テクスチュアリティー（間テクスト性）について

津村 俊夫

プロセスの解明に集中してきた。しかし、一九七〇年代半ばを境として聖書学の流れには大きな変化が生じて来る。それは「文書資料説」の崩壊で、人文科学における歴史主義から構造主義への移行と無関係ではない。ソシコール（F. de Saussure, 1916）以来、「言語学において」時の流れを止めて一つの時点における言語の構造と体系（横軸）を記述する共時的研究と、時の流れという縦軸での変化を扱う通時的研究とが区別され、共時態の優先性が一つの公理とされてきた。このよつた共時性優位の考え方は、テキスト研究における「あるがままのテキスト」から出発する構造主義的研究となり、聖書学における従来の歴史批評学への反動となつてゐる。

聖書学においては、しばしば、歴史性と通時性が混同され、伝統的な歴史批評学の「歴史」（＝通時性）と“spatio-temporal”な歴史性との区別が不明確となり、しばしば両者が混同される。しかし、通時的「変化」は、時空における現実としての歴史とは異なる。例えば、語源研究は、語の歴史（＝通時的变化）を扱つが、その語の使用者の置かれていた時空的脈絡を扱わぬ。今や、『共時性＝反通時性』とこうの図式が、反歴史主義といつ「ポストモダン」の思想と相まって、テキストの持つ時空的脈絡　歴史性　に対する不可知論を助長している感がある。

構造主義の聖書学への適用は、一九六〇年代から七〇年代にかけての構造主義文学批評または文芸学的アプローチとして確立されていくが、プロセスよりも “finished work”としてのプロダクトに注目する。しかし、中には、通時的「資料分析」の成果を保持しつつ共時的アプローチを施すといつ方法論的矛盾を来しているものがある。例えば、チャイルズ（B. S. Childs）の正典批評は、通時的研究成果に立つたうえでの議論である、「資料説」と構造分析は互いに補いあつものと考へる立場（例えば、並木浩一）も、「共時態の優先性」原理に合わない。<sup>1a)</sup> その一方で、「あらがままのテキスト」の表現のレベル（文学構造や修辞・文体）にのみに集中し、テキストとそれを生み出した「著者」の歴史性（時空性）に無関心である新しい文芸批評が行われてきた。

## 「ポストモダン」の聖書解釈

一九八〇年代から一九九〇年代にかけて、聖書学は、「ポストモダン」の思想の流れの中で、更に新しく変化を遂げつつある。<sup>2)</sup> 人文科学において構造主義からポスト構造主義へ移る中で、聖書学でもテキストからの乖離が起つて、著者の抹消が行われる。もはや、著者が意図したことがテキストに正確に命められていかざらかは分からぬ、著者は「到達しえない」存在で、著者の意図を問ひ「」とが無意味だと考へる「著者不在」の解釈学が支配的となる。「」のよつた考え方では、「意味は、読者がテキストを介して著者の意図に出会ふときに現れる」という従来の原則はもはや成り立たないとされる。

「」のように著者に「死刑宣告」を告げてしまった「ポストモダン」の読者は、テキストが記号の体系であり、それらの記号がそれとは異なる体系を持つ他の記号との関係においてのみ意味を持つとする、デリダ（J. Derrida）の脱構築（deconstruction）<sup>3)</sup>の考え方を受け入れる。「」の考え方によれば、いかなるテキストも孤立して読まれることとは出来なく、インター・テクスチコ・アリテイー（間テキスト性）を持つ。更に、「著者不在」のテキスト世界への埋没は、その行き着くところ、読者中心主義に至る。<sup>4)</sup> それは、テキストの軽視または無視に繋がり、意味は読者によって作られるとされる。それゆえ、テキストには多くの解釈の可能性や再解釈があるだけで、正しい解釈といつものなどは存在しない。テキストが無限の意味の可能性を持ちつるからである。このよつた「ポストモダン」の解釈においては、結局のところ、「解釈が全てである」 "interpretation is everything"。<sup>5)</sup>

## インター「テクスチコアリティー

複数のテキスト間の関係を扱う「インター「テクスチコアリティー」の考え方とは、「宗教改革以来の「聖書を聖書で解釈する」という原則とは似て非なるものである。例えば、予型論的解釈は、過去の歴史的出来事を「型」として現在に将来のことと説明する方法であるが、インター「テクスチコアリティー」は、じかにその情報が時間的に先行してくるかを問うことではない。聖書の他の箇所の引用（quotation）や暗説（allusion）も、新約の旧約引用やサムエル記における王位への言及の場合のように、明らかにそれより以前の事柄や情報に関するものである。」<sup>6)</sup> これら、言及とインター「テクスチコアリティー」の前者によつて混同されてしまうと、ソマー（Sommer 1996）<sup>6)</sup> は指摘する。暗説（allusion）は、「一つの文からが先行してくるかを問題にする「連時的」な現象である。それは、限られた数のテキスト間の特定の繋がりを問題にして、著者/テキスト/読者の関係に注意を払う。例えば、近年、「聖書内訳義」（inner-biblical exegesis）を唱道してくるマイシム・フィッシュバイン（M. Fishbane）が、*ハレルヤ四・一三*と創世記一・一の相互依存関係を論じるに際して、「いかにがじかに」と問及してこられるかを問題にする。<sup>7)</sup>

他方、インター「テクスチコアリティー」は、終始「共時的」で、「あるがままのテキスト」への関心があるだけで、背後で「いつ」この資料があつたかという「こと」などは問題にしない。<sup>8)</sup> それでは、「いかなるテキストも、単独のものとして存在するようになったのでもなく、そのよつたものとして聽かれる」ともなし。全てのテキストは、複数のテキストからなるネットワークの構成要素（網のひも）である。<sup>9)</sup> インター「テクスチコアリティー」は、この複数のテキスト間の多様な結合関係や、テキストどうが存在してゐる文化にありふれた表現との間の繋がりに焦点を当てる。

「J. れは、ある複合的な物語の種々の局面の間に相関関係と対話がある」とアーヴィング・バフーチン（Bakhtin）の「対話行為」*dialogization* の考え方<sup>10)</sup> に通じる。

J. のインター「テクスチコアリティー」の考え方は、聖書学に適用されるべきで、学者によつて微妙な違いがある。例えば、シモン（U. Simon）<sup>11)</sup> は、ハンナ物語（サム一）とラケル物語（創世三〇）に表現や「テーマの類似性を認め、それを "intertextuality" と分類する。また、ニールセン（K. Nielsen）<sup>12)</sup> は、ルツ記とゴダヒタマルの物語（創世三八）とに並行関係を認めるが、その根拠として「タマルがゴダヒタマルの隠れ場（ルツ）」<sup>13)</sup> との表現を挙げている。一方、ミスチール（Mitsch）<sup>13)</sup> は、ダントンがナタンの隠れ場（ダントン）を避け、身を隠した「隠れ場（サム一九・二）」が、ダントンがバテシハバと「隠れ」（サム一九・二）行つた罪の行為を予表してゐると考へ、またアッカーマン（Ackerman）<sup>14)</sup> は、アーヴィングの死の記事において、「頭が櫻の木」（サム一八・九）引掛けたことが、「角をやぶにひつかけ」（一頭の雄羊）（創世二二・二三）を連想せると考へる。しかし、これらのテキスト間の繋がりの度合は、がじねぼひもとのものとするか否かは、読み手の判断に委ねられる。

### 「トロトロかみの賢い女」（サム一四）

「ライク（Lyke）は、最近のモノグラフ（1997）の中で、トロトロかみの賢い女のマーシャルのインター「テクスチコアリティー」を、バフーチンの "dialogization" の翻譯にむかへて論じてゐる。<sup>15)</sup> おそらく聖書本文を挙げると

（五節）それで、王は彼女に聞いた。「こうたゞ、『ひつしたのか』」彼女は答へた。「実は、J. の私は、やもめだ、

私の夫はなくなりました。

（六節）「Jのはしためには、ふたりの息子がありましたが、ふたりが野原でけんかをつて、だれもふたりを仲裁する者がいなかつたので、ひとりが相手を打ち殺してしまつた。」

ハイクは、トロアの賢い女のマー・シャルが聖書の他の諸部分とのつながりの「トクスト間連想」（intertextual association）を持つところから、Jのマー・シャルを検討する際のレハヅヤあると想える。そして、その連想を成り立たせる一つの要因として、resonance（共鳴）とallusion（暗喩）を挙げ、それらを次のよう規定する。「共鳴」は、Jの父はそれ以上の事柄が単純な共通の起源を持つことを語り、他方、「言及」は、Jの伝統間によつて強い繋がりがあることを語る。Jののような考え方において、ハイクは、トロアの女のマー・シャルが聖書の他の部分と共鳴する所に言及してこねじが、ダントンの状況におけるのより光を放てるかを理解つるべからぬのである。

「ふたりの息子だ」

ハイクは、トロアの女は「ふたりの息子がいた」とこのように重複性は、創世記の二ノトキストにちなんで語りかになると想える。それは、創世記の主要なトピックの「兄弟の争い（sibling rivalry）」をめぐらゆるのであるからである。ハイクは、「ふたりの息子」のトーマを、カインとアベルの他、「セムとヤペト」、「アブラハムとホル」、「ローマン・ゼル」、イシコマホルトイサク、Hサウトヤトウ等に認める。その半分の例は聖書自体に基づくものではないが、「トキスト」とそれが存在してくる文化にありふれた表現との間の繋がり」に焦点を合わせるインター・テクスチコア・コテイーの立場に立つて、ユダヤ教的伝統をペブル語聖書の文化と設定して、「ふたりの息子」のト

ポスをやねぬのペアに見出す。更に、Jの「ふたりの息子」の要素は、ダントン物語の中で、バトシ・ババの一人の息子、アムノンとトマ・シャロム、ソロモンとアーヤルとの間に組のペアによるもの、複数の繋がり（multiple connections）を持つてこねじハイクは考えるのである。<sup>16)</sup>

「野原で」

「野原で」、「ハイクは、「野原で」とこの表現に注目し、それが申命記11:1-11の「畠」とおおむねこの「野」、ユダヤ表現との関連を語り、両者の依存関係ではなく、それらの間の複数の文化的慣用表現（cultural idiom）を理解しつぶつとこねじる。<sup>17)</sup>

「ひとりが相手を打ち殺して」

「ふたり息子」の一方が「野原で」他方を殺したところ、サム一四・六のマー・シャルは、二人兄弟の争いのトポスによつて、聴き手ダントンやねじよつて自分の状況を解釈し、アブシヤロムとマーハンの事件を連想させ、その点でJの女のマー・シャルはその役割を十分に果たしたと言ふ。

トキスト間連想（intertextual association）

これらの物語の間にある種の連想がなつ立つ反面、厳密な意味では両者の間には相違点も多く存在する。一つの点は、アブシヤロムがアムノンを殺したのは、戦闘的であったのに對し、Jのマー・シャルの子の殺人行為は偶発的であつたのである。また、アムノンの殺害が、「一人だけで野原」いたところに起つたわけではない。それゆえ、「ふ

たりの息子が、野原で」<sup>18)</sup> とこう始まりのマーシャルを聴いたダビデ（及び読者）が、即座にアブシャロムによるアムノン殺害のことを思い浮かべたといひことではない。むしろ、このマーシャルは、赤ず、「一人だけで野にいたカインとアベルの物語を連想させたと考へる」とが正しい。その後、計画的であったアベルの殺害は、アブシャロムのアムノン殺害に繋がるものとして受け取られ、七節で、マーシャルが「世継ぎ」（yōrēš）<sup>19)</sup>に触れるに及んで、聴き手ダビデの心に血の家庭内の問題、とつわけ「世継ぎの子」（zera' サム七・一一・一四）のことが浮上したと想像することは可能である。そして、一三節における、この女の「王は追放された者を戻しておられません」という言葉によつて、このマーシャルがアブシャロムのことを語つてこたのではあると明確に理解できただらう。

このよつてなインタークスチコアリティーに注目するアプローチは、適切にコントロールすれば、有益な方法となる一方で、文脈が全く異なるのに、何か相互に関連があるのではないかと考へてしまつては「連想ゲーム」に墮してしまつ危険性を持つていふ。<sup>18)</sup> その過ちを犯さないために、テキストをコントキストに正しく位置付け、そのコントキストを必要以上にばくじかねないことである。たしかに、神学的には、聖書の全体に渡つた理解が必要であるが、文化的な表現のレベルでは、より直接的なコントキストにおいて、文、文章における「語」の意味をとらえることを出発点とするべきである。やつてなじむれば、文脈を必要以上に大きくとつすわる「レベル・スキッピング」の過ちを犯してしまおう。<sup>19)</sup>

#### 「伝統の共鳴」（resonance of traditions）

ハイクのアプローチのもう一つの問題點は、ヘブル語聖書とコタヤ文学の内だけで、伝統の「共鳴」を認めようとしないことである。コタヤ教の伝承は、ヘブル語聖書がどのよひに読まれ、受容され、保持され、伝えられたかを

示してはいても、聖書の著者がどのような状況においてそれを記したかについてはほとんどの何も語らない。読者は安易に著者を抹消しないで、聖書が最初書かれた状況に出来ただけ近づいて、それを生み出した社会的、文化的背景を覗極めることが肝要である。

聖書は、その表現のレベルでは、詩文の並行法のテクニックやワーディペト（例えば、「地」<sup>18)</sup>「わかつ」<sup>19)</sup>「pr」）に認められるように、古代カナンの文学との連続性を持つていふ。大切なことは、類似性のレベルを見分けることである。文化的レベルにおいては、聖書を「閉じた体系」として扱つべきではない。例えば、「ふたり懸子」や「ふたり兄弟」のトポスは、ヘブルの社会だけに特有のものではないことは、前一二一五年頃のエジプト文学「ふたり兄弟の物語」（ANET, 23-25）からも明らかであるし、兄弟の争いのモチーフは、普遍的なものでもある。今残されている情報だけが當時存在していた文書であると考えるのも出来ない。聖書は、現存してはこな「ヤンヤルの書」（ヨハ二〇・二四、サム一・一八）や「主の戦いの書」（民二一・一四）などの書かれた資料にも言及しているのである。大切なことは、聖書の独自性が、表現の点にあるのではなくて、内容の点にあるところのことである。聖書テキストを「閉じた記述体系」としてじぶん、著者の「古時代」聖書外資料から得られる文化的、文学的、言語的情報を無視するとき、ものもなじみが起りつかないかを、「ポストモダン的感性」によるハイクの聖書解釈がいまじくも示している。

#### 結び

インタークスチコアリティーに注目するとは、聖書の積義の一つの側面としては有益であつてゐるが、同時に多

注



「**この危険性を領ふべし。**我々は、やがて**聖經書トキストル**のものに屬する」とは徹しなければならぬ。」**「ボストン**ダム」と謂ふれぬ今**時代**にて、曲がり、ヘンツル（F. Watson）が主張する、**「文義通りの意味**（literal sense）

**意図**（authorial intention）、**「如臨的解釈**（objective interpretation）を取つて、必勝があらう。トントル（T. Oden）の言葉を借りれば、今JPN、副題のトキストルは**「肉体」に屬する、「トキストルに従ひ」と**、"obedience to the text" が必勝である。  
21) トキストル（聖書）の究極の著者である三位一体の神を恐れつゝ。

- 「land」の語彙。この二つの語は、創世記1章と2章7節で使われ、日本語訳本では「地」の意で翻訳されるのが適切である。  
20) *The Earth and the Waters in Genesis 1 and 2, 78*, n. 42参照。  
Francis Watson, *Text and Truth: Redefining Biblical Theology* (Edinburgh: T & T Clark, 1997), 95-126 (Ch. 3: "Literal Sense, Authorial Intention, Objective Interpretation: In Defence of Some Unfashionable Concepts").  
21) Thomas Oden, *After Modernity... What?* 80.

(福音書研究会)